

インカレはどこに行くのか？

インカレ愛知サブコントロール報告

木村佳司

日本最高峰の競技会として、崇高なまでに神聖視されてきたインカレ。そのインカレも大きな曲がり角に差し掛かっている。

2003年3月に開催されたインカレ愛知でサブコントロールを行った木村が提出した報告の一部を掲載する。

崩壊するインカレ

インカレが崩壊しつつある。

最盛期千数百名を集めた頃に比べて参加者の数が半減し、資金的にも人的にも立ち行かなくなっている。学連はここでインカレを大きく変革しようとしている。

721名。これが先日開催された2002年度インカレクラシック種目の学生参加者数である。最盛期のインカレは千数百名の学生参加者があったが、今はその半分の規模になった。

10年振りにインカレ会場に行った人ならその減少ぶりを肌で感じることができるだろう。以前のインカレの開会式と言えば、開場前から各大学の特攻隊が行列をなして場所取りに血眼になった。リレー会場に選手を乗せたバスが到着すると、応援場所を確保するためにダッシュする姿を見ることができた。しかし今やそんな風景は過去のものとなりつつある。

学生連盟への加盟員数は第2次ベビーブームが大学を卒業することから減少し、最盛期2700名ほどいた加盟員は1300名程度に留まっている。ここ10年ほどで加盟員は半減しているのである。20年ごろ前から始まった少子化の影響、学生のスポーツ離れは、各学生スポーツ団体で問題となっているが、オリエンテーリングもその例外ではない。

いままでのインカレ

1979年春に第1回インカレが開催された時、インカレは1日だけのイベントだった。個人のレースを行い、その総合タイムを大学毎に集計して団体戦

順位を競っていた。

この時のインカレは参加者がまだ数百名のイベントであったが、熱血な若手OBの活躍のおかげで地図や競技面では日本をリードする競技会へと育ってきた。インカレは与えられるものではなく、自らが作り出すものだという気風が満ちていた時代だった。

そして参加人数も徐々に増えてきた。第7回の日光インカレを境にインカレは大会規模を拡大する。競技は2日間となり初日が個人によるクラシック競技、2日目が団体戦のリレー競技となった。この時のトレインは今でもオリエンティアの聖地と言われる日光。素晴らしいトレインに最高の地図、そして最高の競技環境。このときからインカレは日本最高の競技会となったのだ。その後も学生参加者数は増え続け、運営者たちは膨大な参加者を宿泊輸送する手段と、最高のトレインとをどのように両立させるかで悩んだものだった。

肥大化するインカレ。増え続ける学生オリエンティア。学生オリエンティアの人数がピークだった1993年、春のインカレとは別に秋にインカレショート大会が始まった。当時豊富にいた学生オリエンティアと学生OBを中心に、こちらも徐々に参加者数を伸ばした。1997年の富士宮大会では総参加者数は1000名を越え、名実ともに秋のビッグイベントになった。

しかしその頃から学連加盟員の減少は始まっていた。先日行われた愛知インカレでは学生参加者は700名強。この数字はインカレが2日間制になった時点まで戻っている。

インカレクライシス

参加者数の減少により、今までのインカレ開催規模を保つことが難しくなっている。

それはひとつは参加費収入の減少、もうひとつはOBの減少による運営者の減少である。

オリエンテーリング用地図を作成するのは実に手間のかかる作業である。いくらコンピュータ作図が進んだとはいえ、フィールドワークは相変わらず人手によるものだ。当然そこには多く

の費用が発生する。現在の春のインカレはクラシック競技で使用する地図とリレー競技で使用する地図の2区域を用意することが多い。資金が豊富なうちはこの2区域分の地図を用意することができたが、参加者数が減少してゆく中で、2区域分の地図を確保することが困難になりつつある。特にクラシック競技で使用する範囲は非常に広い区域が要求されるため、それを調査・作図する資金が大量に必要となる。一方、その広い区域を使用する選手権クラスの人数は先日の愛知インカレから削減されている。

また2区域を使用するとすると、競技会場も2箇所に分散することが多くなる。こうなると全く独立した2つの大会を行っているのと同じで、運営人数がかなり必要となる。学生の競技人口が減少するなかで、大学OBに頼った現在の運営形態では、運営者を集めることも難しくなっているのである。

愛知インカレ2002の実行委員長・三浦千鶴は、開催地・愛知県より遠く離れた神奈川県在住である。別に愛知県に地縁があるわけでもない彼女が実行委員長を務めるということが現在の運営者不足を象徴している。



開会式を含めて3日間盛りあがるインカレ。学生が目指すこの素晴らしい舞台を創るのは、学生とそのOBの熱意である。

ダウンサイジングの断行

ここで日本学連ではインカレのダウンサイジングとも言える改革を進めている。それはインカレを以下の基準で行おうとするものである。

- ・開催時期は従来のインカレと同じく、各年度の3月に開催する。
- ・ミドル競技（従来のショート競技）とリレー競技の2日間制
- ・作成地図は1枚。これを2日間使用する。
- ・会場はミドル、リレー競技とも共通。

見とおしとしては2004年度インカレ（2005年春開催）よりこの形態のインカレに移行する予定である。

2003年3月10日の日本学連総会にて発表された2003年度-2005年度のインカレビジョンは以下の通りである。

2003年度インカレ	
ショート	矢板（塩谷）
クラシック・リレー	青山高原
2004年度インカレ	
ロング	愛知（三河高原）
ミドル・リレー	日光（今市）
2005年度インカレ	
ロング	愛知（三河高原）
ミドル・リレー	愛知（場所未定）



この魅力的なインカレがいつまでも学生の目標として継続開催してゆくために。

まずは愛知インカレから

これらのインカレ改革に先駆けて、愛知インカレ2002ではさまざまな運営のダウンサイジングを行った。

- ・会場をクラシック競技とリレー競技で共通にしたこと。
- ・会場名などを事前にきちんと公開したこと。
- ・クラシックのスタートエリアを選手権・一般クラスとを共通にし、それを事前に公開したこと。
- ・クラシック選手権のフィニッシュを会場までちょっと強引に誘導したこと。
- ・クラシック一般クラスの地図回収

を行わなかったこと。

今まで、インカレ運営には一種独特の「秘密主義」とも言える価値観が横行していて、実際に何度もインカレ運営に立ち会うたびにこの秘密主義を感じることがある。

競技の公平性を保つために主催者が守秘義務を負う事はオリエンテリング大会において多々あることは否めない。しかし守秘義務は競技の公平性を保つための手段であって目的ではない。主管者はどこまで守秘義務を負わなくてはならないのか？それは参加者をどこまで信頼するにかかっている。

しかし、インカレは学生が主催する競技会のはずである。単なる主管者である実行委員会が、主催者の学生を信頼しないというのは誠におかしな話である。

実行委員会は参加者が公平に競技を行う最低限を提供し、運営コストの増大をもたらすような過度な公平性の確保はしないという、考えてみれば当たり前の運営を行ってもらうように心がけた。

たとえば、テレインと会場を公開し、立入禁止区域を事前に公開する。テレインと会場を公開することにより、実行委員会の作業内容は減少する。これは運営コストの減少を意味する。そのかわりに学生は立入禁止区域をきちんと守り、競技会が公平に行われるように努める。

もうひとつ、たとえば選手権スタートと併設スタートを共通にする。運営人数は削減されこれも運営コストを低減する。そのかわり各参加校のオフィシャルや参加者は会場とスタートを往復して競技情報を伝達しないように公平性の確保に努める。

各施策の結果、運営者の数は最盛時のインカレ運営者数の半分程度で乗りきる事ができた。かなりギリギリの運営面もあったが、それは今後の効率化の課題である。

インカレは後輩のために？

「後輩たちにインカレをプレゼントする」・・・一般的にはこれがインカレを運営するOB達のモチベーションとして最も大きいものだろう。自分の出身大学がインカレで力いっぱい走る。競技の成功、そして失敗。どちらも感動するシーンでもある。

しかし、実行委員長の三浦千鶴の出

身校「信州大学」からのエントリーは無かった。そうオリエンテリングクラブが消滅してしまったためである。彼女はモチベーションが保ちにくい状況で良く実行委員長をつとめてくれたと思う。

本学生オリ!



閉会の挨拶をする実行委員長の三浦千鶴。彼女の母校の姿は表彰台はおろかインカレ会場には無かった。クラブが消滅したのだ。

逆に自分の出身大学がインカレでバリバリがんばっている大学のOBたちは、もっとインカレ運営に貢献して欲しいと思う。チームオフィシャルやコーチとして選手と一緒にインカレを目指すのもいいが、インカレという舞台そのものをプレゼントする立場に回って欲しい。そういう人たちが居なくなれば、自然にインカレは無くなってしまう。

学生のみなさん、インカレは毎年自動的に開催されると思いこんでいないだろうか。インカレが開始されて四半世紀経ったが、この間ずっと、学生にインカレをプレゼントしたいというOB達の強い思いだけでインカレは成り立ってきた。次は自分たちがインカレを後輩にプレゼントする番になる。インカレは勝手に開催されない。自分たちで創るしかないのだ。

（木村佳司）